

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 李 之易

論 文 題 目

現代中国都市部における回族女性に関する人類学的研究
—浙江省義烏市の事例を中心として—
(An Anthropological Study of Hui Women in Urban China:
A Case Study of Hui Women in Yiwu City Zhejiang
Province)

論文審査担当者

主 査

	名古屋大学	教授	櫻井龍彦
委員	名古屋大学	教授	成田克史
委員	名古屋大学	准教授	笠井直美
委員	名古屋大学	准教授	坂部晶子

論文審査の結果の要旨

1, 本論文の構成と概要

浙江省義烏市には中国ムスリムである回族のコミュニティーがある。主として中近東やアフリカのイスラーム諸国との交易で全国からムスリムが集まってくるため形成されたコミュニティーであるが、当地の回族女性は敬虔な信者であるという評価と信仰心をもたず世俗化・漢化しているという評価に分かれる。本論文はこの正反対の評価を矛盾したものとして捉えるのではなく、彼女たちが現実の日常生活の中で置かれた立場から、どのように宗教やジェンダー規範を語り、行動しているかを参与観察と聞き取りによって詳細に分析し、その結果、回族女性が折り合いをつけながら柔軟に対応している様相を明らかにしたものである。

李氏は、回族女性が資本主義、市場経済、男女平等などの近代理念に由来する生活価値観を日常実践において一見相反するイスラームの宗教信仰と切り離すことなく、いかに両者を調整しつつ共存させているか、その能動的な創造性に注目する。彼女たちの語りと行動からは、その生き方を「宗教」と「世俗」との関係性を聖/俗の二項対立で固定化した見方では解釈できず、また単純に抵抗あるいは服従のどちらかに還元することもできない。モスクにおける実践、アラビア語通訳やネットビジネスへの従事、スカーフのファッション化というような事例をとりあげ、それぞれの局面で回族女性が「宗教」と「世俗」の対立を超え、その間を流動するハイブリッドな言説とアンビバレントな行動を示すことで独自の能動性・主体性を発揮していると論じている。

本論文は序章、終章をふくめて全体で6章から構成されている。

第1章（序論）では、研究の背景、目的と意義、研究方法、先行研究の紹介と問題点、調査日程・調査地の概要などを述べ、論文全体の構成を説明する。中国都市部の回族女性を理解するためには、二重の周縁化をまず理解しなければならない。つまりマイノリティの回族は漢族を主流とした世俗的な現代中国社会から周縁化されていること、その回族の中の女性は、男性中心であるイスラームの宗教言説や制度から周縁化されていることである。こうした権力的な構造の中においても、回族女性は自発的、創造的に行動している側面があることに注目し、「エージェンシー」（能動性）概念の導入によって女性の戦略的な生き方を分析する重要性を指摘する。

第2章では、回族の歴史と現在を漢化・世俗化とイスラーム運動とが同時に進行している動向をふまえて整理している。回族は一般的な民族の定義にはあてはまらず、もっぱら宗教意識の共有によって結ばれている特異な集団といえる。近代になって社会主義国家に組み込まれ、非ムスリムの主流社会で生きることになり、漢化・世俗化の圧力が一層強まった。その中で回族女性たちはどのような状況に置かれているのか。それをイスラーム女子教育を行う「女学」から明らかにしている。

第3章では、義烏市内のモスクと2つの宗教勉強会から宗教実践をおこなう空間への女性の立ち入り制限、その空間内の女性の実践の特徴などを観察記録し、女性たちが空間利用の面で周縁化されながらもジェンダー構造に制約されただけの存在ではなく、自らの利益のために積極的に行動していることを述べる。また宗教勉強会への参加をとおして、ネットワークを広げ、社会との接触を可能にする道を切り開いていることを述べる。そこから教義や制度に直接抵抗するのではなく、構造に働きかけながら創造的に従うことで抑圧から回避するという生き方を論じている。

論文審査の結果の要旨

第4章では、アラビア語通訳として働く女性およびネットビジネスに従事する女性を対象にし、彼女たちの経験と語りを取り上げている。これらの経済行為によって比較的裕福となった中間層の女性に向けられるイスラームの男性中心的なイデオロギーは非難に傾いた厳しいものがある。しかし女性たちは公的な宗教イデオロギーに対し、独特なジェンダー役割に関する言説を作り上げ、生き方を模索している。そしてイスラームと非イスラームのジェンダー秩序が組み合わさった女性たちの模索的な語りは、いまや商行為をとおして女性の間にも広まり、回族女性も持つジェンダー秩序に影響を与えつつある状況を指摘している。

第5章では、回族女性のスカーフの着用とそのファッション化の現象を捉え、その実践の意味を論じている。1980年代の改革開放政策以後、スカーフをつける女性が増加し、そのスタイルも多様化してきた。一見、こうした現象はイスラームの教義に沿った敬虔な行為にみえるが、女性たちは教義によって一方的にその意味を押しつけられているわけではなく、世俗的な主流社会との関わりを考えながら実践的な選択をしている。またファッション化も回族女性間の階層を差異化する意識の表れでもあり、主流社会への参入や都市中間層への向上という願望が背景にある。こうした願望もイスラームの教義からは非難されるが、変動しつつある状況の中での具体的、選択的な実践であることを論じている。

第6章（結論）では、以上の記述をふまえて、中国都市部の回族女性の「エージェンシー」の可能性についてまとめている。回族女性の生き方を、イスラームと非イスラームという教義上の対立、宗教と世俗という制度上の対立を前提にして、どちらか一方に還元してしまうことはできない。二重の周縁化に直面して生きる女性たちが、一見矛盾する諸言説の間を横断し、複数のイデオロギーを見つけながら流動的、複合的な主体として自己を再定義していく「エージェンシー」を發揮していることを論じている。

2. 本論文の評価

本論文は以下の点において評価できる。

1, 中国都市部の回族女性が現在置かれている状況を明らかにした。この状況は回族が比較的多く偏在し一定の自治権をもつ地域や農村部とは違うもので、商業都市部であるため、より一層回族女性は宗教と世俗、イスラームと非イスラームという二極化の影響と主流社会および男性中心主義からの二重の周縁化の影響にさらされている。

2, そのような状況の中で回族女性は抵抗するのでも服従するのでもなく、ジェンダー構造のニッチな部分を捉えて、教義をかわしたり、ずらしたりしながら柔軟に対応している。その生き方は確かに定型もなく一貫性もないものではあるが、状況対応型であるがゆえに、回族女性の言説は能動的な力となっている。筆者はそれをエージェンシーという概念で理論的に説明している。

3, ムスリム女性としての生きにくさを対社会や制度の問題として正面から抵抗、改革しようとするのではなく、エージェンシーの發揮によって模索する生き方に、二極化と周縁化の現状から解放される可能性を見いだせるとした。体制に切り込む政治運動や思想改革によらず、ささやかな日常実践のなかでの小さなエージェンシーの積み重ねが、家父長イデオロギーに風穴をあける可能性を現在進行形の実態を調査することで示した。

論文審査の結果の要旨

一方議論が十分に展開できなかった側面もある。

対象地域を歴史と伝統をもつ回族の定住地域ではなく、外地から経済利益を求めて臨時的に集まり、移動性の高い都市を選び調査したことは、現代的な課題に取り組んだ先見性として高く評価できる。しかし一方、こうした新興の商業都市は商売の浮沈によって人々の集散がみられる不安定な地域ともいえるため、本論文で論じられた回族女性の生き方が、今後の中国社会でどこまで持続的なのか、あるいは他地域の回族女性への波及力をどこまで評価できるかは不明である。

また主流社会の中のマイノリティである不利益、イスラームと非イスラームとの対抗をうまくすり抜けて相対化する回族女性の生き方は、限られた選択肢の中での自己正当化といえるが、そこに創造性を見ようとするならば、創造によって作られる次のステップが具体的にはどのようなものであるかを知りたい。たとえば第4章で、アラビア語通訳やネットビジネスに従事する女性たちの経験と語り が回族女性の間にも広まり、ジェンダー秩序に影響を与えつつある、と指摘しているが、その影響が今後どのように展望できるかまでは議論が展開していない。

しかしながらこうした課題は本論文の価値や独創性をそこねるものでは決してなく、今後の発展課題として期待すればよいものである。

3. 評価結果の判定

上記4名の委員からなる審査委員会は、平成30年2月7日、本審査委員会を開催し、博士課程（後期課程）のあるべき水準を満たしている、オリジナルな成果を含んでいることなどを確認・評価した。

よって本論文は博士（学術）の学位に値するものと判断する。